



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	南方徴用作家
Author(s)	神谷, 忠孝
Citation	北海道大学人文科学論集, 20, 5-31
Issue Date	1984-02-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34367
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_PR5-31.pdf



南方徴用作家

神谷 忠孝

はじめに

アメリカの日本学者であるドナルド・キーンは、一九四一年（昭和一六）から敗戦に至る時期の日本の文学者を論じた「日本の作家と大東亜戦争」（注一）という論文で、次のように指摘している。

戦争中のことをいっくろおうとする日本人が時につくりだした意見とは反対に、作家たちは戦争勃発の際、ほとんど一致して軍国主義者の背後に立った。彼らは、緒戦の勝利を誇り、戦勢が傾きはじめたときは努力を倍加するよう力説した。敗戦が迫ってきたときにのみ、若干の作家は意気を沮喪させたが、他のものは、さらに自己を鞭打って狂熱的な愛国主義に走った。少数の作家の消極的行動以外には軍国主義に対する抵抗はなく、消極的に行動

をした人も、主としては発表をさしひかえた年輩者であった。

ドナルド・キーンのこの指摘は、大局的にみると正しい。日本人の書く昭和文学史が戦時下の文学になんとか抵抗の痕跡を探ろうとするのに対する、大胆な問題提起になっているのである。ドナルド・キーンの問題提起は結論で述べるところにあらわれている。

しかし、私は最後に一つの点を強調したいと思う。私は、戦争中の日本における作家の言動が必然的に伝統とか国民精神とかを反映したものとは信じていない。日露戦争の際には、作家たちは全く別の言動を示した。幻滅が表面化してくるまでは、いかなる戦争文学もあらわれなかった。一九〇五―六年の日本人は、一九一七年のアメリカ人よりも戦争熱に浮かされることがすくなかった。一九四一年の日本における作家のいちじるしく増大した重要

性は、マス・メディアの産物であるが、それは、作家を愛国行動の指揮者たるべき地位に否応なしにつかせ、かくして彼から一九〇五―六年の先輩が享受していた自由を奪い去ったのである。作家は、公人となることにより、すべての日本人に期待されたのと全く同じように行動することを強制されたのであり、芸術家としての個々の権利を奪われたのである。もしこの分析が正しいとしたなら、大東亜戦争中につくりだされた日本の文学は、世界のどの作家でも自国に対してだけでなく自分の芸術に対してもっている義務を忘れるときに直面する危険の警告として役立たなければならぬ。

この文章の言わんとするところを補足すれば、日本の近代文学はかつて、与謝野晶子の『君死にたまふこと勿れ』（一九〇四）や田山花袋の『一兵卒』（一九〇八）などの反戦文学の伝統をもっていたにもかかわらず、さらには第一次大戦後の武者小路実篤『或る青年の夢』、平沢計七『二人の中尉』（一九二三）、黒島伝治『櫓』（一九二七）などの厭戦小説があるにもかかわらず、一九三一年以後のいわゆる十五年戦争下では、なぜその伝統がなくなったのかということである。この素朴な疑問に対する答えは、今のところ歴史学者からも文学者からもなされていない。そればかりでなく、十五年戦争下での文学者のはたした役割についてもまだ説明は進んでいない。個々の作家の個別研究を通して少しずつなされているが、全貌がみえていないのでその作家の位置がみえてこないということもある。

一九三七年にはじまる中日戦争についてはある程度、そこではたした文学者の役割について研究が進んでいるが、やがて戦線が拡大して一九四一年の太平洋戦争（大東亜戦争と呼ぶ方が歴史に即していると思うが）以後になると、多くの文学者が南方諸島に派遣されて従軍の任務をはたしたといわれるが、その範囲や仕事の内容について、いまだにはっきりした資料がないのが現状である。そこでまず、資料の地道な探索を基盤にして、わかった範囲で全貌解明にとりくんでみた。次の段階として、個別に作家の作品に即して徴用体験がもつ意味について考察することが必要になってくるのはもちろんであるが、ひとまず中間報告とする。

一、背 景

文学者の戦争へのかかわりを考察しようとするとき、間接的な影響として、戦時下の国民文学論を問題にしなければならない。平野謙が『太平洋戦争下の国民文学論』（『文学』昭和三〇・二）で指摘しているように、昭和十二年の中日戦争勃発前後と太平洋戦争前後の二回にわたって話題になったわけだが、まず中日戦争前後の「国民文学論」がでてくる背景をみてみよう。

昭和十年代における民族主義再考のきっかけは、横光利一の「純粋小説論」（『改造』昭和一〇・四）に端を発している。横光はそこで、プロレタリア文学の衰退と転向という現象についてふれ、明治以来、文学者が外来の思想に頼ってきた破綻が転向を現出させたの

だと論じ、「日本人の思想運用の限界が、これで一般文人に判明してしまつた以上は、日本の真の意味の現実が初めて人々の面前に生じて来たのと同様であるのだから、いままでもあまりに考へられなかつた民族について考へる時機も、いよいよ来たのだと思ふ」と述べた。当時の横光利一は、前年に発表した「紋章」（「改造」昭和九・一・九）が評判となつて文壇の若い旗手として注目されていただけにその影響力は大きかつた。

横光の問題提起を実践しようとしたのが、雑誌「日本浪漫派」（昭和十・三・十三・八）に拠つた人々であり、その中心であつた保田与重郎は、「明治の精神」（「文芸」昭和十二・二・四）で内村鑑三と岡倉天心を軸に民族主義の問題を前面にうちだして話題となり、「日本的なるもの」についての論議がさかんになった。その論議の中から、まずでてきたのが、杉山平助の「国民文学私見」（「文芸」昭和十二・七）である。杉山平助は「国民文学」を二通りに解釈し、「ある国民の持つてゐる最高の文学」という定義と、「一定の目的意識をもつたもの」とに分け、後者の目的意識については、「国家至上主義を基礎とし、明かに自己の属する国家の世界における優位を信じ、その精神的及び物質的優秀を世界における最高の目標として観念し、全国民の精神を、その方向に対してオーガナイズするため創作せられる文学」として定義した。

浅野晃の「国民文学論の根本問題」（「新潮」昭和十二・八）が話題になつたのは、「明治以後の日本の文学が不朽のタイプを作り残すことができなかった」として、具体的に民族のカオスに裏づけられ

た現代の英雄のタイプを創出しようと提言したからである。日本の古典文学の中に英雄を探索する保田与重郎の問題提起よりも、浅野晃の方が現代に目を向けさせた分だけ関心をよび、折から中日戦争が勃発したことと重なつて注目をあびたのである。続いて中村武羅夫が「国民文学に対する一私見」（「新潮」昭和十二・九）で、藤村の「夜明け前」や秋声の「あらくれ」を国民文学と呼んで然るべきであると主張したが、あまり話題にならず、現実におきてゐる戦争とのかわりて国民文学を考えようとする風潮がジャーナリズムでおこつた。

そのきっかけは、昭和十二年八月から十三年はじめにかけて、出版社、新聞社が作家を中国戦線に送つたことからはじまる。主な作家として、吉川英治（東京日日新聞）、岸田国士、小林秀雄（文芸春秋）、尾崎士郎、林房雄、石川達三（中央公論）、榊山潤（日本評論）、立野信之（改造）、佐藤春夫、保田与重郎（新日本）、吉屋信子（主婦之友）などが特派員として中国へ出かけ事変ルポルタージュを発表したことで関心が高まつた。そして、火野葦平が兵士の体験を通して書いた『麦と兵隊』（昭和十三・九、改造社）『土と兵隊』（昭和十三・十一、同）が発表されるに及んで、戦争文学が大きな話題となった。

たとえば、座談会「戦争文学について」（「文芸」昭和十三・十二、出席者―谷川徹三、芹沢光治良、高見順、豊島与志雄）の中で谷川徹三は、「土と兵隊」の中には、国民的叙事詩的文学である「平家物語」の伝統がある形で生きているという発言をしていて、戦争文学

を国民文学にくみいれる見方をしている。

これより先、中日戦争一年後の昭和十三年八月二十三日、内閣情報部と文芸家の懇談会が開かれ、従軍作家の詮衡が行なわれた。『文芸年鑑・一九三九』（昭和十四・十、第一書房）によると、文芸家側から菊池寛、久米正雄、吉川英治、白井喬二、横光利一、片岡鉄兵、尾崎士郎、佐藤春夫、小島政二郎、吉屋信子、北村小松、丹羽文雄の十二名が出席し、「文壇側は双手を挙げて情報部の計画に賛成、北支行希望の横光氏を除き全部従軍を希望した」とある。横光利一の辞退が認められていることを考えると、強制的なものでなかったことがわかる。菊池寛が中心となって詮衡が行なわれ、三十数名の作家が漢口、南支に従軍したわけだが、多数の作家が軍部に協力したこの「ペン部隊」は、それ以後の文学者が戦争に協力させられてゆく出発点となった観がある。（注2）

この時期の、火野葦平ブームに続く従軍作家の活動に対し、大宅壮一は『葦平文学』は何処へ?（『日本評論』昭和十四・三）の中で、「海と兵隊」「花と兵隊」の四大新聞への同時連載の原稿が電報で送られてくるという盛況ぶりを伝えたあと、「火野文学が全日本を風靡したとき、文壇の一部では、自分も戦争に行きさえすればあれくらゐのものは書けないことはないといったものもあるし、口に出してはいなくとも心の中でさう思つたものも少なくないであらう」と述べ、また、「火野の人氣の中には、作品のもつ価値や興味から離れて前線の兵隊さんに対する国民大衆の感謝の念が含まれてゐるのを見逃すことはできぬ」とブームの背景を洞察している。

当時の戦争小説論を読むと、火野葦平を中心に、上田広『黄塵』（改造社、昭和十三・十一）、丹羽文雄『還らぬ中隊』（中央公論社、昭和十四・三）、石川達三『武漢作戦』（中央公論社、昭和十五・九）などが話題になっており、いずれも従軍体験の小説化である。しかし、戦争の長期化にともなつてマンネリ化はまぬがれず、あらたな視点が要望されはじめたとき、浅野晃の『国民文学への道』（新潮）昭和十五・十一）が発表され、第二次「国民文学論」のきっかけとなった。

浅野晃はそこで、「国民文学」とは「国および国民に対して十分責任を負ふところの文学」であり、「かような責任は進んで国の運命に参加してゐるものにとつては当然至極ものであるとし、「憂国の志士」の系譜として、岡倉天心、北村透谷、正岡子規、国木田独步、長谷川三葉亭、徳富蘆花、夏目漱石などの名をあげ、かつて「市民文学」と呼ばれたものが、今日の「国民文学」であると述べた。

伊藤整の「国民の文学」（『新潮』昭和十五・十二）は、浅野晃の「国民文学への道」と同誌に発表された保田与重郎の「民族の優秀性について」の二評論への感想を述べたものであるが、浅野晃が主張した「志を述べるもの」としての文学観に「はっとした何ものかを感じた」と書いている。さらに、保田与重郎の評論に対しては、「芸術上の至上の形を時代を超えてとりあげ、それを主張の根本にし、現代の生活はそれに合致する部分から義務づけられるような意見を立てることは、その妥当さにおいて、私をうなづかせない」というように、古典文学を規範にして現代を批判する方法に疑問を提

しながら、現代の芸術とかわりなく、自己を「純化」しようとする態度に、「志」つまり決意を読みとっている。そして、伊藤整自身の仕事としては、「現在のような時代の写生をしてみたい」「文学者の日記のような形のものとしてでもいいから、こういう時代の生活の相を描いて見たい」というように、外部には広く眼を向けながら、創作の方は極く私的にやりたいと書いている。

伊藤整の「国民の文学」には戦時下の国民文学論の総括があらわれている。すなわち、一方に保田与重郎に代表されるような、古典文学を再評価することで現代文学を啓蒙しようとする論と、浅野晃に代表されるような、近代文学の中に「志を述べる文学」の系譜を樹立し、そのことで現代の文学を導こうとする二つの国民文学論の型があった。伊藤整はそのことをみすえうえて、自分はそのどちらにも属さないことを表明している。国民文学論への批判的な評論として、伊藤整のほかに、赤木俊（荒正人）の『国民文学論』に触れて（『現代文学』昭和十五・十二）、小田切秀雄「国民文学への省察」（『日本文芸』昭十六・七）などがある。言論統制下の国民文学論に対する文学者の発言には、戦時体制を直接批判することは不可能であったとしても、国民文学論に便乗して体制に順応する文学者を批判する余地があったわけで、消極的ながら抵抗しようとした姿勢が認められる。

こうした一部の文学者の抵抗にもかかわらず、太平洋戦争開始以後は、国民文学論が国策文学論へと変質してゆき、その典型的な例が『国民文学の構想』（聖紀書房、昭和十七年十二月）である。内容

は「農民文学と国民文学」（岩倉政治）、「国民文学としての大陸文学」（福田清人）、「戦争と日本文学」（日比野士朗）などの項目にみられるように国策文学の中に国民文学論が吸収されてしまった実態があらわれている。

二、徴用の範囲

昭和十四年七月十五日から発動施行された「国民徴用令」は、その第二条で、「国家が職業紹介所その他の募集によって必要な人員を得られない場合に限り、国民を徴用して総動員業務に従事させるもの」とその目的を述べ、当面の範囲を工、鉱業関係とし、第四条では、除外範囲を「陸海軍人の現役、陸海軍学生生徒、医療、獣医」とした。罰則として「応じない場合は一年以下の懲役、あるいは一千元以下の罰金」と規定した。

この徴用令が文学者に適用されるようになったのは昭和十六年十月になってからである。『文芸年鑑、二千六百三年版』（桃蹊書房、昭和十八年八月）には、「陸軍省ではマレー、ビルマ、スマトラ、ジャワ、比島などの各地域における文化工作、特に緊急に要望される報道宣伝部門を更に強化、推進するため、今度南方に骨を埋むるの気概を以て挺身報道宣伝事業に勤務する要員を募集すると。」と十六年十月の項に書かれている。

十六年十月に陸軍省の方針が出てきた背景を『近代日本総合年表』（岩波書店）でみると、昭和十六年の項は「6・6 大本営、対南

方施策要綱を決定」「6・25 連絡会議、南方施策促進に関する件を決定（南部仏印進駐）」「7・28 蘭印、日蘭石油民間協定を停止」「10・5 大本営、連合艦隊に作戦準備を命令」「10・6 南方軍戦闘序列・南方攻略作戦準備を命令」などとなっている。

「陸軍報道班員」「海軍報道班員」の人选が、どこで、どういう基準でなされたか今のところはっきりしていないが、文学者を兵士の身分で戦場に派遣するという発想は、ドイツナチスの「宣伝中隊」からでていることはたしかである。当時、大政翼賛会実践局文化部の部長であった高橋健二は「ドイツの宣伝中隊について」（「新潮」昭和十七・三）でPK (Propaganda Kampagne) について説明している。それによると、「PK隊員は文人であり、画家であり、編輯者であり、ジャーナリストであると同時に、写真、映画、ラジオ等あらゆる報道機関を駆使し、飛行機にせよ、戦車にせよ、潜水艦にせよ、近代兵器の赴くところ、どこにでもついて行く」とされている。そして、兵士の身分である理由については、「宣伝中隊所属の報道員の最も重要な特質は、彼ら自らが兵士であるといふことである。文士にせよ、ジャーナリストにせよ、カメラマンにせよ、無線技士にせよ、宣伝中隊に配属されるものは、すべての兵士同様、召集され、もし兵役に服したことの無いものならば、兵士としての軍事訓練を先づ受ける」と書かれている。

徴用作家の記録を読むと、陸軍と海軍ではちがっているが、「奉任待遇」と辞令にあって、士官の身分で参加させられたことや、文学者のほかに画家、新聞記者などあらゆる職業の人が召集されたこと

がわかり、ドイツの「宣伝中隊」をほぼ踏襲したものであった。徴用は第一次から第三次、再徴用に及び、昭和十六年から十九年にかけて、多くの文学者が南方に派遣された。『文芸年鑑・二千六百三年版』には「軍報道部員として活躍せる作家氏名」とあって、五十三名の文学者の名があるが、「ジャワ、ボルネオ方面」に書かれているうち、寒川光太郎は海軍関係、堺誠一郎は「馬來方面」に入れるのが正しい。ここに書かれた五十三名は第二次までであり、その後に徴用された作家名を『日本近代文学大事典』（講談社）および太平洋戦争下の記録によって補足追加すると次のようになる。

（マレー方面）会田毅（小説）、北町一郎（小説）、秋永芳郎（小説）、伊地知進（小説）、井伏鱒二（小説）、大林清（小説）、小栗虫太郎（小説）、海音寺潮五郎（小説）、北川象一（冬彦）（詩）、小出英男（劇作）、堺誠一郎（編輯）、里村欣三（小説）、神保光太郎（詩）、月原橙一郎（歌）、寺崎浩（小説）、中島健蔵（評論）、中村地平（小説）。

（ビルマ方面）岩崎栄（小説）、小田嶽夫（小説）、北林透馬（小説）、倉島竹二郎（小説）、榊山潤（小説）、清水幾太郎（評論）、高見順（小説）、豊田三郎（小説）、山本和夫（詩）。

（ジャワ・ボルネオ方面）浅野晃（評論）、阿部知二（小説）、大江賢治（小説）、大木惇夫（詩）、大宅壮一（評論）、北原武夫（小説）、郡司次郎正（小説）、武田麟太郎（小説）、富沢有為男（小説）。

（フィリピン方面）石坂洋次郎（小説）、上田広（小説）、尾崎士郎（小説）、今日出海（小説）、沢村勉（劇作）、柴田賢次郎（小説）、

寺下辰夫(詩)、生江健次(劇作)、火野葦平(小説)、三木清(評論)、山上伊太郎(シナリオ)、安田貞雄(小説)。

(海軍関係) 浅見淵(小説)、石川達三(小説)、井上康文(詩)、海野十三(小説)、鹿島孝二(小説)、角田喜久雄(小説)、北村小松(劇作)、木村莊十(小説)、斉藤良輔(劇作)、桜田常久(小説)、寒川光太郎(小説)、沢田謙(評論)、多田裕計(小説)、田中克己(詩)、坪田譲治(童話)、戸川幸夫(小説)、中山善三郎(劇作)、中山義秀(小説)、丹羽文雄(小説)、新田潤(小説)、浜本浩(小説)、半田義之(小説)、久生十蘭(小説)、堀川潭(小説)、間宮茂輔(小説)、湊邦三(小説)、村上元三(小説)、山岡莊八(小説)

右の文学者は報道班員としての辞令を受けて、最低五ヶ月から三年まで任務についたものの名前である。ほかの大物として、同盟新聞嘱託として南方各地を取材した大仏次郎、海軍嘱託の吉川英治、尾崎一雄、新聞社の特派員としてジャワ、マレー方面を視察旅行した佐藤春夫、臨時に徴用されて南方を慰問した林芙美子、阿部艶子、小山いと子、佐多稲子、美川きよ、水木洋子、吉屋信子、文化使節としてインドシナに赴いた森三千代などの女流がある。このほかに応召、軍属、特派員というかたちで南方にかかわった文学者二十余名(注3)を加えると、百人を越す文学者が南方を体験したことになる。現代文学史の中で、中国体験に匹敵するほどの数になる。

次に、選考の基準について考察してみると、昭和十三年の「ペン部隊」経験者として、尾崎士郎、富沢有為男、浅野晃、丹羽文雄、

浜本浩、北村小松、吉屋信子、林芙美子、吉川英治、湊邦三、中国戦線の特派員経験者、石川達三、大仏次郎などがめだつ。次にめだつのは芥川賞受賞の石川達三、小田巖夫、富沢有為男、尾崎一雄、

火野葦平、中山義秀、半田義之、寒川光太郎、桜田常久、多田裕計、直木賞受賞の海音寺潮五郎、井伏鱒二、村上元三など、新人として注目された作家がずらりと名を列ねている。大林清、海野十三、小栗虫太郎、鹿島孝二、角田喜久雄、山岡莊八などは大衆に人気のある作家として選ばれている。旧左翼派の作家では里村欣三、大宅壮一、間宮茂輔、「人民文庫」の高見順、武田麟太郎、新田潤などがい

る。さらに、リベラリストと目されていた中島健蔵、清水幾太郎、今日出海、三木清なども徴用されているのをみると、反対制の知識人をも動員して効果を高めようとした当局の意図がみえてくる。

中島健蔵が『昭和時代』(岩波新書、昭和三十二年五月)の中で、「徴用令状を受けて最初に東京都庁に出頭したとき、はじめて自分たちのなかまには三木清、清水幾太郎がいることがわかった。われわれは、当時の軍部には受けがいいはずがなかった。そこで、この徴用は、実に徴の字の下に『心』がついた『懲用』であろうといううわささえ飛んでいた」と回想しているが、反対制にとらまれていた知識人にとっては「こらしめ」と感ずる一面があったようだ。

しかし、高見順のように別の受けとめかたをした作家もいる。伊藤整との対談「戦争と文学者」(『文芸』昭和三十一・八)の中で徴用時代について、「あれは、恥を言うううだけれども、ホッとしたな。あのすぐ前に書いた『文学非力説』というのが祟ったんですね。あ

れて執筆禁止になる。丹羽君はエロで執筆禁止になる、という噂が新聞に出た。ぼくは前歴があるし、どうしようかと思っていた所へ白紙がきた」と述べている。また、戦時下の言論弾圧のきびしさにふれながら、「ぼくなんか、ほんとに……南方に行けば、心にもないことは書かないでも済むしね。戦争謳歌でもないし、協力でもない。形としては協力だけだね。ビルマの第一部隊に志願して、ついていてね、進んで兵隊さんと一緒に苦勞した。歯がガタガタになるくらいにね」と回想している。

昭和十六年一月から五月にかけて、画家の三雲祥之助とインドネシアを旅行した高見順は、帰国した日本で文学者の戦争協力がさかんに論議されている風潮を横目でみながら、「文学非力説」(「新潮」昭和十六・七)を書き、そこで、戦争には反対ではないが、文学を動員したところで役にたたないと主張して、尾崎士郎に反論されたりしていた。旧左翼作家というレッテルをはられて言論の不自由を痛感していたときの徴用は、どこかホッとするものがあつたらしい。この事情は武田麟太郎も同じであつたようで、『ジャワ更紗』(筑摩書房、昭和十九・十二)は妙に明るい内容となつている。

かくして、第一次徴用作家は昭和十六年十一月に船で日本を出発し、船中で真珠湾空襲の報を聞いて南方各地へと渡つたわけである。地域によつて体験は異なるが、ジャワ島への敵前上陸に遭遇した阿部知二は『火の鳥』(創元社、昭和十九・七)の序文で、「私は旅行者として行つたのでもなく、また貿易業者や留学生として行つたのでもなく、大東亜戦がはじまるとともに軍に属するものとして渡つ

た。私を運んだものは定期船でも旅客機でもない。身をつつんだものは、白いバナマ帽や麻服や白靴のかはりに、汗ばんだ戎衣であり鉄甲と剣とであつた。海上の夜々に身を横たへたのは、煽風機の下の白い寝台ではなく、真暗な船底にしつらえられた『春棚』の荒蕪であつた。岸でむかへたのは、税関吏やタクシーや苦力の群の呼声ではなく、闇黒に炸裂する十字砲火と爆雷と魚雷のとどろきとであつた。つまり私は戦の眼を通して南の土地を觀たのだ」というように、厳しい状況の中で行動したことを証言している。

三、文化工作

徴用された作家たちは南方諸島で宣伝班に所属して仕事をした。総称して「文化工作」と呼んだが、大別すると三つに分けられる。第一は対占領地宣伝、第二は対軍隊宣伝、第三は対敵宣伝である。このうちもっとも力を入れたのは対占領地宣伝である。その中でも核になつたのは、日本語教育の普及であつた。マレー、ジャワ、フィリッピンのうち、昭和十七年二月十五日に英軍が降伏したシンガポールに拠点をおいたマレー班と、三月九日にオランダ軍が降伏したジャワ班は、戦闘がなかつたので計画通りの宣伝活動が実行された。これに対し、ビルマ、フィリッピンの方は戦闘が相つぎ、作家たちの書いた文章は、文字通り従軍記録が多い。以下、マレー、ジャワ班を中心に、宣伝活動がどのように展開されたかをみてみよう。

神保光太郎の『昭南日本学園』(愛之実業社、昭和十八・八)およ

び『風土と愛情』（実業之日本社、昭和十八・十一）は、シンガポールにおける「文化工作」の実態をくわしく記録した書である。シンガポール陥落一ヶ月に、昭南と改称されたシンガポールに入った神保光太郎は、昭和十七年五月から十一月にかけて開設された「昭南日本学園」の園長として、第一期から三期まで、千三十四名の卒業生を送りだした。帰国後に書いた「南方文化建設の諸問題」（『風土と愛情』所収）において、次のように報告している。

過去一ヶ年、南方文化建設の第一步を画した業績を顧みるに、これを私の知る昭南島方面の場合にあつては、第一に博物館、図書館、学校等のイギリスが残して行つた文化遺産の整備と復興であつた。一方、文化映画やニュース映画を上映して、日本の姿を原住民に伝えること、更に、毎日の各国語の新聞に依つて、系統的ではないが日本の理想、日本の事情、日本文化の一端を徐々に刻みつけて行つた。それと共に、日本語は彼らの日本への道の案内役として、旺んに教授され、又、新聞社主催の、日本文化紹介の講演会なども催され、原住民の音楽家を糾合して楽団を組織せしめたり、現地人画家のために美術展覧会を開催した。又、新聞社では屢々、原住民の知識層の代表の如きを集めて、日本文化に関する座談会も試みた。

マレー半島及びスマトラの住民を対象としたマレー班の仕事は、多種多様の人種を相手にしなければならなかった。中国人、インド

人、マレー人のために、漢字新聞「昭南日報」、英字新聞「昭南タイムス」、カタカナ新聞「サクラ」を発行し、また、日本の軍人を対象に「陣中新聞」も発行した。その「陣中新聞」の昭和十七年四月二十九日で、中島健蔵は「日本語普及運動宣言」（『昭南日本学園』所収）を書いており、日本語普及の目的と意義について次のように述べている。

新しき国民が、たとへ片言交りにもせよ悉く日本語を語る日こそ、大東亜共栄圏確立の実があがつた日である。軍政関係の諸員は勿論のこと、皇軍を挙げて此の大事業に力を尽さうではないか。正しく強く美しき日本語を馬米及びスマトラ島に充満せしめよ。之も大切な御奉公の一つである。（中略）

新秩序建設の手はじめとして、日本語を真に普及せしめることこそ、天長の佳節を迎へ、聖寿の万歳を壽ぎ奉る佳日に最も意義ある運動である。国旗のひらめく所、言葉も亦日本語に満ち溢れなければならぬ。かくして馬來もスマトラ島も真底から日本の一角となるのである。

ここで述べられていることは、他のビルマ、フィリピン、ジャワなどで宣伝班に従事した作家たちにも共通しており、日本語を普及させて日本精神を植えつけ、大東亜共栄圏の構想を具体化しようとしたのである。シンガポールでは、年齢を十六歳以上二十五歳までと限定して日本語を教えたが、第一期生の人種構成は、中国人百

四十一名、インド人百十八名、マレー人七十二名、その他十名となっている。神保光太郎の『昭南日本学園』を読むと、受講生の多くは就職に有利という打算で応募したものがほとんどで、植民地支配になれている住民のたくまじさが窺える。

ジャワの日本語普及については、浅野晃の『ジャワ戡定余話』（白水社、昭和十九・一）が資料として詳細である。マレー語で光を意味するチハヤを採って「千早学校」と名づけられた小学校に日本語の課目を設け、まず「君が代」を教えるところからはじめたわけだが、インドネシアの血統の正しい家柄の子弟を集め、将来の指導者の育成を考えたようで、このあたりはシンガポールのやり方とちがっている。さらに、浅野晃、富沢有為男も加わって十三人のメンバーで、マレー語の新聞「アシア・ラヤ」を発行して、そこに岡倉天心の「東洋の理想」のマレー語訳を載せるなどもしたようだ。

ジャワの宣伝班のやった仕事は、帰するところ三亜運動の指導にあつたと言つてよいと思ふ。『アシア・ラヤ』も、チハヤ塾も、すべて三亜運動から生れたのである。三亜運動の掲げた三つの標語——あじやの光、日本。あじやの母体、日本。あじやの指導者、日本。——は、皇道に帰るのだから、アジヤいな世界もその処を得ることのあるべからざるの理を端的に示したものに外ならなかつた。（中略）

千早塾では、原住民の血統正しい子弟たちをはじめから「すめらみたみ」として教育してゆかうとした。この子供たちが、開校

式に当つて、読んだ誓ひの言葉の中には、「天皇陛下の御楯となります」といふ意味がはつきりと述べられてゐた。この子供たちは、原住民のままで、すでに皇事に勤める者として、育て上げられるべきなのであつた。（ジャワの朝明け）

これは帰国後の浅野晃の報告である。浅野の場合、岡倉天心のいう「アシアはひとつ」を大東亜共栄圏構想の中心においており、インドネシア人の皇民化政策に情熱を燃やしたのである。

ビルマについては、倉島竹二郎が『明けゆくビルマ』（三田文学出版部、昭和十八年七月）の中で次のように記述している。

最近のビルマに於ける日本語熱は大したもので、ラングーンだけでも二ヶ所日本語学校がひらかれ生徒の数も段々増加してゐる。一ツは、愛国親日の傑僧として有名な故ウ・オッタマ僧正の実妹ド・インゾ女史がやつてゐられるウ・オッタマ日本語学校で、もう一ツは、軍のやつてゐる蘭貢日本語学校である。僕達はよくシヤンバツグといふ布の鞆を肩から掛けて日本語学校に通ふ少年少女達に行逢ふが、彼等は如何にも嬉しうにまた希望に満ちた顔をしてゐる。かうした子供達が日本語で日本の教育を受け、やがてビルマを背負ふ人間になるのかと思ふと、僕はたまらない歓喜の情の込上げてくるのを覚えるのだ。

シンガポールのように日本の作家が日本語教育にたずさわるとい

うことはなかったようだ。占領地が安定するにつれ、日本から日本語教育に従事する教師が多数徴用されたので文学者は、ことばの専門家として補佐する役目をはたした。『明けゆくビルマ』で印象的なのは、B・I・A（ビルマ独立義勇軍）という、日本の進撃に呼応して蜂起した青年たちに対する対応である。B・I・Aがビルマ防衛軍として日本軍の指揮下に入り、青年たちがそれぞれの郷里に帰ってしまったとき、倉島竹二郎は、「ビルマのやうな国では、勲章の一つも下げて自分は祖国の急を救った名誉ある軍人だといふ誇りをもつて堂々と郷里に帰るのと、B・I・Aをお払ひ箱になつたといふ惨めな気持にさせるのと、其処に想像以上のひらきが生じるのだ」と考え、「愛国の士が一転して流賊と化する」のをふせぐ目的で、「B・I・A 帰郷の諸君へ」という文章を倉島竹二郎が書き、詩人の山本和夫が、「B・I・Aを称ふ歌」を作り、いずれもビルマ語に翻訳して配布したということがくわしく書かれている。これも「文化工作」のひとつのかたちであった。

フィリップンについては、今日出海が「文化戦線にて」（「文芸」昭和十七年十月）の中で、フィリップンのフランスとアメリカによる長期の支配が色濃く残っており、白人との混血を尊ぶフィリップン人に対して、日本は彼らにアジア人としての独立の精神を与えるべきだという提案がなされている。そして、芸文科科长に尾崎士郎を据えて文化工作が進行していると報告し、日本語に関して、「最近、公用語としてカタログ語と日本語が決定されたが、日本語の普及はまだまだこれからである。ついこの間、三木氏が音頭をとつて、日

本語普及週間をやつてゐた」と報告している。

南方各地における日本語普及の文化工作の一端をみてきたわけだが、文学者がどのような意識で対処していたのかということに関して、ひとつの証言がある。浅野晃が『遠征前後』（日本文林社、昭和十九・五）の中で、文化工作には、急がば廻れの気持が大事であると述べたあと、文学者の任務について、「いつもそこに一見詰り当面の必要とは迂遠のやうな、縁の薄いものでも、あくまで身を以て日本の文化と云ふものを体現してゐるやうな人間が何人かそこにゐないと具合が悪い。斯う云ふ点なんか本来言つたら、文学者の役割だと思ふ。無能でもよい。しゃべる必要もない。そこに居つて自ら日本の詰り深い文化的伝統といふものを、伝統と云ふやうな、雰囲気始終持ち続けて行くと云ふ風な、役割を果して行けばそれでよい」と述べている。ここには自己正当化の気味もあるが、多くの徴用作家がこのように自己納得させていただろうと想像される。

対占領地宣伝ではこのほかに、日本映画の上映もなされた。はじめは「日本の陸軍」、「日本の海軍」、「日本の若人（神宮競技）」といった、日本の力を誇示するような記録映画を上映し、次第に日本の重工業を紹介したものや、娯楽映画へと移っていったようだ。小出英男の『南方演芸記』（新紀元社、昭和十八・六）によると、兵隊慰問用にとりよせた「ロッパのお父ちゃん」、「エノケンの春風千里」、「縁結び高田馬場」などを、マライ語、インド語、中国語、英語などに翻訳して上映したところ評判がよかったそうである。マライではまた、小出英男の演出で「桃太郎」を原地の人に演じさせており、鬼

が島の鬼の中にルーズベルト、チャーチル、蒋介石の仮面をかぶせたものを登場させて桃太郎に退治させるという趣興をとりいれたりした。

文化工作の第二である対軍隊宣伝は、各地における「陣中新聞」の発行がその主なものであるが、たとえば、ジャワで発行されていた「うなばら」には、陸軍中佐で当時、東印度方面作戦軍宣伝報道部長であった町田敬二が、「潮音譜」という欄に毎日文章を発表し、のちに『赤道直言——潮音譜』（アルス、昭和十九・三）にまとめた。この本には、浅野晃、富沢有為男、阿部知二、北原武夫、大木惇夫などが跋文を書いている。大木惇夫の『海原にありて歌へる』（原地出版、のち北原出版、昭和十八・四）に収録された詩の多くは「うなばら」に発表されたものである。

ほかにも、たとえば寒川光太郎の『薫風の島々』（文松堂、昭和十八・七）の「まへがき」をみると、「明日の突撃をひかへた征野の兵士達が幕舎の中で読む気楽な本は、如何に彼等の心を慰めるかを私は目のあたり見て来てゐる。これもさうしたつもりで読んでいたゞきたい」と書いている。内容はインドネシア各地の風習や伝説の紹介を通して、彼らがいかに愛すべき人たちであるかということを書いたもので、兵隊たちが占領地の住民を理解することによって、欧州の軍隊と闘う意義を伝えようとするものになっている。もっと直接的なかたちとしては、同じく寒川光太郎の小説集『敵』（金星堂、昭和十九・二）にみられるように、オランダ軍にとらえられた日本人の屈辱をテーマとした作品を通してオランダ兵の理不尽を訴える

ような作品もある。白人を憎悪の対象として描いた戦争小説には対軍隊宣伝の意味が含まれているのである。

第三の対敵宣伝については、日本文学報国会編『新生南方記』（北光書房、昭和十九・四）がその実態の一端を伝える。南方に徴用された二十名の作家による五十六篇の文章が載っているこの本の内容は、南方各地の印象記を中心に、住民がいかに日本軍の上陸を歓迎したかが書かれている。地域も、ビルマ、ジャワ、バリ、マライ、昭南、比島、セレベス、ボルネオ、仏印、スマトラ、チモールと広範囲にわたっている。「凡例」の全文は次の通りである。

これらの短文は昨年四月以来半歳に亘つて「新南方読本」の題下に対米放送に翻訳使用されたものである。日本放送協会国際部の企画に基き本会南方文化研究委員会の陸海軍報道班作家がそれぞれ執筆したものであるが、各作家の現地に於ける日常的見聞を語りつつその間おのづから我が南方建設の着々たる進捗状況と原住民の協力ぶりを感知せしめ、敵国民をして秘かに我が実力を畏怖するの念を懐かしめることを主眼としてゐる。南方建設の実状はもとより、戦時下我が対敵宣伝放送の実相は国民すべてのひとしく知らんと欲するところであらう。ここにその一部を輯録し、特に放送協会下村会長の序文を請うて国内に公にする所以である。

昭和十九年三月

日本文学報国会

対敵宣伝の前線におけるやり方については、鈴木茂の「対敵放送」

（『バタアンコレヒドル攻略戦』所収、講談社、昭和十七・七）がある。拡声器を敵軍の近くの交通壕にとりつけ、はじめは前線將兵のために国民進軍歌のレコード慰問をやり、続いて英語による対敵放送、それがおわると再びレコードをかけるそう。作家が前線に赴くことはなかったようだが、対敵放送はこのようになされた。

四、作家たちの対応

徴用作家たちが書いた報告文や小説などを概観してみると、およそ四つぐらいのタイプに分類できる。一つは、大東亜共栄圏の思想を信じ、体制側の眼によって都合のよい部分だけを報道するもの。二つめは、情報や伝聞による先入観を現地で確認して報道するもの。三つめは、現地の人と積極的に接触して直接的に情報を収集し、正確さを出そうとするもの。そして、四つめは、自己の感性をたよりにして、心に触れたできごとを書いているものである。

もちろん、海軍報道班員と陸軍報道班員のちがいが、滞在期間の長短、派遣された国の事情などによって内容に変化があることはたしかである。同一の作家でも、一から四までのどれにもあてはまる場合もあるので、作家によって分類するのは無理であるが、各地を転々とし、現地の人とあまり接触しない海軍報道班員の書いたものより、半年以上にわたって現地に住みつき、ことばもおぼえた陸軍報道班員の書いたものの方が、内容に深まりがある。だから、異民族体験を伝えてくれるのは陸軍報道班員の方が多い。一から四までの分類

に従って、いくつかの典型をひろってみよう。

まず一のタイプであるが、数にすると圧倒的に多い。大きなめやすになるのは、軍人に序文をもらっている本である。たとえば、小出英男の『南方演芸記』や、井伏鱒二、海音寺潮五郎編輯の『マライの土』には、マライ派遣軍宣伝部長・陸軍大佐大久保弘一が序文を書いており、以下目についたものを列挙すると、海軍大佐平出英夫（寒川光太郎『敵』、海野十三『赤道南下』）、海軍大佐高瀬五郎（寒川光太郎『波未だ高し』）、陸軍少将和知鷹二（『比島戦記』）、陸軍中佐阿野信（『マライ戦話集』）などがあり、内容は大体において戦意高揚、現地人宣撫をテーマとしたものが多い。序文の有無だけで内容を判断するのは危険であるが、たとえば寒川光太郎を例にとると、軍人の序文がある『敵』『波未だ高し』の内容は、白人の暴虐や勇敢な兵隊を描いていて軍部に密着しているのがあきらかである。ところが同じ作者の『蕉風の島々』を読むと、小説と紀行文のちがいはあるものの、南方諸島の習慣とか現地住民の心の美しさを淡々と書いていて、戦争の影があまりない。いわば、軍人の序文のついた本でタテマエを表現し、本音を紀行文で述べているともとれるのである。

二つめのタイプは海軍報道班のものに多いのだが、現地の人とあまり接触をもちえないこともあって観察が表面的である。明治以来の「南進」政策のために書かれた本の知識から、古い南洋観の範囲内で物事を見てしまっている。たまに上陸してその国の住民をみることがあっても、風景の中の点景として描写されることが多い。占

領地の住民は上陸してきた日本人に対して儀礼的な歓迎の態度をあらわすわけだが、それを真に受けとってしまっているところがある。浅野晃の『ジャワ裁定余話』はひとつの典型である。

三つめのタイプとしては、たとえば阿部知二の『火の島』があげられる。この本は主としてインドネシアの歴史に注目しているのだが、帰国してから文献を集め、自分で見てきたことと先人の書いたものを確認しながら慎重に記述している。高見順の『ビルマ記』もそうだが、作家らしい好奇心を発揮して、その国の伝説を集めたり、珍しい動植物について通訳をたてて聞きだしたりしている。徴用されたことを好機ととらえて、自分の糧にしようとしているのである。

武田麟太郎は、徴用期間を自ら延長して二年間ジャワに滞在したのだが、『ジャワ更紗』を読むと、ことばをおぼえてインドネシアの青年と親しくなつて愛着の度合いを深めていった様子がうかがえる。

「自分たちのインドネシアに対する広い無限の愛情、彼らの日本人への深い無限の信頼は、美しいジャワの島では、まことに固く結ばれ、着々大東亜文化共栄圏の理想はすすんでゐるのである」という文章をよむと、武田麟太郎がインドネシア独立を真に願っていたことがわかる。昭和十八年五月、日本はインドネシアを日本帝国の領土とすることが決定されたとき、武田は失望して下町にいりびたつて無頼な生活をしたと、大谷晃一の『評伝武田麟太郎』（河出書房新社、昭和五十七・十）は書いている。帰国後、大東亜戦争を聖戦というなら、インドネシアを独立させるべきだと、浅野晃とともに大東亜院、陸軍省、海軍省などをまわつて奔走したとも評伝で書かれ

ているが、多くの徴用作家の中で、真剣にその国の将来を案じたのは武田麟太郎ぐらいであろう。

四つめの、自己の感性をたよりにした作家としては井伏鱒二や北原武夫などがその典型といえる。井伏鱒二の場合、その特徴は戦争のことがあまり書かれていないことである。そして、身近に接した現地の住民をよく描いていることである。たとえば、「アブバカとの話」（『モダン日本』昭和十七・四）の「アブバカ、小説『花の町』（『東京日日』、大阪毎日）昭和十七・八（十七・十・七）にてでくるペン・リョンという少年、「昭南日記」（『文学界』昭和十七・九）のタムリンなどのように、使用人や知り合いになった現地の人の名前をはっきり書いている。名前を記すということは、相手を対等な人間としてみていることを意味している。

井伏鱒二を庶民作家とよぶのが一般的であるが、そのことは日本人を書くときばかりでなく、占領下のアジア人を書くときにもあてはまる。「花の町」のみどころは、イギリスから日本へと支配者がかわつても、状況に順応して生きのびようとする庶民のしたたかさが書かれているところである。為政者がどう変ろうとも、生まれ、婚姻し、子孫を残すために必死に生きる姿に庶民の原像をみている井伏鱒二の眼は、占領地においても不動である。戦争批判を直接書けなくても、生きることと一所懸命の庶民を描く姿勢の裏に、戦争のおろかさを批判する精神がこめられているのである。徴用作家に限らず、戦時下の作品を読むときのひとつの視点として、庶民をどう描いているかをおさえる読み方は有効である。

前出の武田麟太郎も、『ジャワ更紗』の中で庶民を描いているのだが、井伏鱒二とのちがいは、武田麟太郎が大東亜共栄圏の構想を信じていたのに対し、井伏の方は信じていなかったところにある。このちがいは資質のちがいというより、旧左翼作家の武田麟太郎はどこかで大義名分を必要としていたことが根底にある。文学にイデオロギーをもちこむことを拒否するところから出発した井伏鱒二のような作家にとって、大東亜共栄圏などというような為政者の作ったスローガンは眼中になかったのであろう。武田麟太郎にかぎらず旧左翼出身の作家には、たとえば里村欣三に極端にあらわれているように、聖戦を頭から信じてしまった作家が多いのである。

北原武夫はリベラリストと目されていた作家であるが、占領地からの報告文にはその本領が発揮されている。「ジャカルタ入城日誌」(『文学界』昭和十八・二)を例にとると、昭和十七年三月一日未明、バタビア沖海戦のさなかに敵前上陸した徴用作家の一行が、一週間後、日本軍によって制圧されたインドネシアの首都バタビア(今のジャカルタ)に入城する。沿道には日章旗をふって歓迎するインドネシア人がひしめいている。さらに、インドネシアでの生活が続くにつれ、道行く子供や農夫が日本式のお辞儀であいさつするようになる。それをみて北原武夫は次のように書いている。

—— こういうインドネシアの子供や、それから先刻の農夫などが僕等に向かってするお辞儀や敬意の表し方は、セランの町でも実にしばしば出会ったが、僕はその度に、どういふわけか何か厭

な不愉快な気がしていけない。日本人が何のためにここまで戦いに来たか、またその戦いが彼等にとってもどういう意味を持っているか、第一日本人というのはどういう人種か、そういうことには彼等は一切無知に違いないが、そのくせ、そういう民族に特有の本能的な自然さから、日本人と見るとびよこんとお辞儀をする。日本人を尊敬していると言えどそれまでだが、こういう意味での尊敬の仕方は肝腎の根底がないのだから、違った事態に立ち至れば忽ち崩れるに決まっている。頼りないだけではない。こういう意味の尊敬は自他共に不要である。黠くとも真に鞏固な平和の状態で僕らの手によって確立されるまでは。――

(昭和戦争文学全集・4、集英社刊)

ここで北原武夫は、「不愉快」ということばに端的にあらわれているように、感性を判断の基準において物事をみている。こういう卒直な報告文は珍しく、北原武夫の感性がひとときわめだつ。さらにみてゆくと、「現代精神の行方」(『文学界』昭和十八・五)では、ジャワでの文化工作を回想して、文化工作が文学者に向いた仕事ではないことを実感的に述べたあと、当時さかんに論議された「思想戦」ということばにふれて、「彼自身の思想に何の不安も感じない思想家、おのれの思索の上にいつも安心して寄りかかっている思想家」が、不安の影さえもなく戦争を、日本の将来を論じていることを批判し、「国民が銃を取っているのに何をしているのだとどやされ」て、あわてて「新しい世界観の樹立」などと言いだしたのだと、暗に、京

都学派や「近代の超克」座談会（「文学界」昭和十七・十）を批判している。この発言の背景にはジャワでの文化工作体験を通して得た現実感覚が働いていると思われる。

同時に発表された「薔薇について」（「文学界」昭和十八・五）では、ジャカルタでの生活体験として、ある時、机の上の一輪の薔薇をみたとき、「ある強いはげしい想念が不意に起こった」と記し、「僕は思わずそれを口に出して、一人でつぶやいたものだ。僕は言い難い確認で、身体が疼くような気がした。——全くだ、冗談じゃない。一輪の薔薇の美しさを描くことは男子一生の仕事に足るのだ、と。」と書いている。

これは、戦場という極限の世界で、徹底した行為の世界に生きる、武人というべき軍人の何人かと接して、行為と芸術について考えをめぐらすところから生じた想念として説明されているが、結論として次のように書く。

小説家は小説に専念せよ、などと言っているのではない。誤解しないでほしい。国家が危急に瀕しても小説家は小説だけを書いていなければならないのだ、などと言っているのでもない。分り難いかもしれぬが、おのれの仕事の生命が表現の世界にあると信ずることと行為の世界にあると信ずることとは、まるで覚悟がちがっているという簡単明瞭なことを僕は言っているのだ。

（引用は講談社刊「北原武夫全集」より）

多くの徴用作家の文章の中から、戦地へ赴いたことによってかえって自己の芸術への信頼を確認している北原武夫をクロージアップしてみたわけだが、こうした現場をふまえた発言の重みは、日本国内で論議されていた観念的な国民文学論の根底をゆるがす結果をもたらした。昭和十八年以後のジャーナリズム界では、徴用体験をもつ作家の発言が主流を占めるようになっていったのである。「実行と芸術」という、昭和文学の作家たちが一樣になった課題が、外部からの強制であつたにせよ、大規模な作家集団を南方に送りこむかたちで試されたわけで、不毛とされる敗戦間近の作家の発言に重要な問題提起が認められることを確認しておきたい。

五、戦後の回想類・まとめ

『文学・昭和十年代を聞く』（勁草書房、昭和五十一・十）の中で中島健蔵は、「報道班員とか宣伝班とか徴用の問題についての調査はまだ、あまり行なわれていません。これからやがてそっちの調査を進める人も出てくると思いますが」という質問に対して、「しかしやっても、おそらく真相はつかめないだろう。つまりわれわれがほんとうのことを言わない限りは、僕は一生のうちに必ず書く気だがね。こつちも相当に弱点を出さなければならぬだろうが、同じ徴用令状でも、自分から運動して、令状を出してもらったのもいるわけだ」というように答えている。この中の「僕は一生のうちに必ず書く気だがね」というところは、のちに『回想の文学5・雨過天晴の巻』

(平凡社、昭和五十二・十一)となるわけだが、そこでも中島健蔵は自分の弱点を充分だしきれずにいる。そのため真相はまだよくみえてこないままに、徴用作家も次々に他界され、このままでは永久に真相はみえてこないかもしれない。

真相とは何かということになると、たとえば、同じく『文学・昭和十年代を聞く』で、井伏鱒二が、シンガポールの大虐殺について風聞を伝えている部分とか、寺崎浩の『戦争の横顔——陸軍報道班員記』(太平出版社、昭和四十九・八、井伏鱒二跋)に、マレー派遣軍の輸送船内で、前線に出ることになっていた記者出身の報道班員二人が、事前に書類を見て指揮官に密告書を提出して、自分たちを兵隊の後からついて行く資料班に入れるように画策した事件を暴露したものなどがある。これについては、井伏鱒二が、『キナバルの民』の作者のこと(堺誠一郎『キナバルの民』解説、中公文庫、昭和五十二・八)でもふれているが、報道班員内部の醜い葛藤は戦争中には書けないことであった。

早い年代のものでは、井伏鱒二の小説「佗助」「二つの話」(昭和二十一)が日本兵への批判を書いたのをはじめ、佐多稲子の「虚偽」「泡沫の記録」(昭和二十三)、火野葦平「青春と泥濘」(六興出版、昭和二十四・三)、今日出海「徴用記者」「孤立の影」(「天皇の帽子」所収、ジープ社、昭和二十五・七)、豊田三郎「招待状」(昭和二十九)などが、それぞれ小説のかたちで徴用時代にふれている。

徴用時代にふれた小説はこのほかにも多くあると思われるが、高見順と伊藤整の対談「戦争と文学者」(『対談現代文壇史』中央公論

社、昭三十二・七)や、高見順『昭和文学盛衰史・二』(文芸春秋新社、昭和三十三年・十一)などにおける直接的な証言が資料としては役立つ。戦前と戦後における、徴用体験者の発言や文章をつきあわせてみることも重要だが、真相の核になるのは、当時の内閣情報部あるいは陸、海軍宣伝部の内部資料を探しだし、企画の立案者、選考基準を探ることおよび本当の目的はどこにあったか、文学側の協力の度合などについても究明が必要となってくる。

巨視的な観点としては、太平洋戦争下の南方徴用が、明治以来の「南進論」の一帰結であったという歴史的検討に加えて、戦後の日本が経済進出というかたちで、いまま「南進」政策を続行していることを念頭におく必要があるだろう。従来の中国、朝鮮を中心においた「方法としてのアジア」の視野の中に、いかにして東南アジアの問題を収めるかという課題は、戦時下の南方徴用をぬきにしては考えられないのである。

注

1 『日本の作家と大東亜戦争』(Donald Keene, Japanese Writers and the Greater East Asia War, Journal of Asian Studies, Vol. 23, No. 2, 1963)——引用は信夫清三郎『太平洋戦争』と『大東亜戦争』(『世界』昭和五十八・八)より。

2 漢口従軍——久米正雄、片岡鉄兵、川口松太郎、尾崎士郎、丹羽文雄、浅野晃、岸田国士、瀧井孝作、中谷孝雄、深田久弥、佐藤惣之助、富沢有為男、林美美子、白井喬二、杉山平助、菊池寛、佐藤春夫、吉川英治、小島政二郎、北村小松、浜本浩、吉屋信子
南支従軍——長谷川伸、土師清二、中村武羅夫、甲賀三郎、湊邦三、野

村愛正、小山寛二、関口次郎、衣笠貞之助、清瀬英次郎、菊田一夫、北条秀司、中川栄三、小石清、天野雉彦
詩局部隊——西条八十、佐伯孝夫、飯田信夫、古関祐而、深井史郎
(『文芸年鑑・一九三九』より)

3 会田雄次(応召)、秋谷豊(応召)、鮎川信夫(応召)、大岡昇平(応召)、岡田誠三(特派員)、片山桃史(応召、戦死)、加藤道夫(陸軍通訳官)、黒田三郎(南洋興発社員、現地召集)、香田照雄(応召)、高祖保(応召、戦死)、小松清(ベトナム独立運動参加)、酒井正平(応召、戦死)、霜多正次(応召)、竹森一男(応召、現地召集)、豊田穰(応召)、野間宏(応召)、橋本徳寿(南方軍軍属)、蓮田善明(応召、自決)、古山高麗雄(応召)、森川義信(応召、戦死)、中谷孝雄(応召)

資 料

徴用文学者たちが現地から送った報告文、小説、帰国してから書いた回想記、小説、詩などは、昭和十七年二月から昭和二十年七月にかけて、雑誌、新聞などに発表された。単行本の多くは、既発表のものを収録したものである。ここでは主要な雑誌、新聞に発表されたものを年代順に列挙し、単行本については収集できた範囲でとりあげ、とくに執筆者が複数にわたっているアンソロジーについては、既発表のものを含めて、できるだけ本の内容がわかるようにした。小説、詩についてはかっこの中で注記し、何も書いていないのは評論、紀行、報告文などである。

間宮 茂輔 雲の上 文芸 17・2
高見 順 ヴィクトリア・ポイント見聞記 改造 17・3

堺 誠一郎 マレー西海岸部隊 中央公論 17・3
寺崎 浩 南国の月 文学界 17・3
同 彼南の月 文学界 17・4

武田麟太郎 上陸一箇月後のジャバ 朝日新聞 17・4・7
同 親しみ易いジャバの印象 朝日新聞 17・4・14

井伏 鱒二 アブバカとの話 モダン日本 17・4

北村 小松 見よダヴァオ市の同胞を 中央公論 17・4

榊山 潤 一夜の飛行場(小説) 改造 17・4

中村 地平 森の中の歌—マレーのバンドン 新潮 17・4

山本 和夫 ビルマ戦線猛進記 日本評論 17・4

里村 欣三 歴史的会見を観たり 現代 17・4

高見 順 工兵山に挑む 中央公論 17・5

寺崎 浩 彼南雑稿 文学界 17・5

尾崎 士郎 戦地より 文芸 17・5

山本 和夫 英霊ラングーンに入城 文芸 17・5

北原 武夫 バタビア音信 読売新聞 17・5・21〜23

『大東亜戦争と帝国海軍』(興亜日本社、昭17・5)

北村 小松 ダバオ通信

海野 十三 ニューアイルランド通信

石川 達三 新嘉坡への道

山岡 荘八 潜水艦の索敵行

尾崎 一雄 『南の旅』(大観堂、昭17・5)

北村 小松 南方余談 朝日新聞 17・6・18〜19

間宮 茂輔	月と共に征く—ニューギニア	中央公論	17・6	尾崎 士郎	爆撃のあと	
海野 十三	熱帯戦線必携品談義	改造	17・6	上田 広	戦線と銃後	
森 三千代	仏印の文学	新潮	17・6	今 日出海	比島の現実	
『マレー電撃戦』（講談社、昭17・6）				石坂洋次郎	マニラの印象	
井伏 鱒二	マレー人の姿			石坂洋次郎	馬	
中村 地平	森の中の歌			火野 葦平	米比軍の性格	
上田 広	地熱—或る報道班員の手記	文芸春秋	17・6	『スラバヤ・バダビア沖海戦』（文芸春秋社、昭17・7）		
高見 順	ラングーン現地報告	日本評論	17・7	斉藤 良輔	スラバヤ沖海戦詳報	
今 日出海	比島だより—河上徹太郎宛	文学界	17・7	斉藤 良輔	壮絶・バダビア沖海戦	
高見 順	ビルマ戦線の草木	新潮	17・7	豊田 三郎	シャンの日	
武田麟太郎	妻への手紙	文芸	17・7	寒川光太郎	ボルネオ紀行—タラカンの印象	文芸 17・8
北村 小松	珊瑚海の戦慄	現代	17・7	寒川光太郎	ボルネオ紀行—バリックバパン	改造 17・8
北原 武夫	バダビア日記	読売新聞	17・7・30	間宮 茂輔	香料と古城の島	新潮 17・8
『バタアンコレヒドール攻略戦』（講談社、昭17・7）				『ビルマ戡定戦』（講談社、昭17・8）		
火野 葦平	バタアン半島総攻撃従軍記		17・7・30	山本 和夫	シャン高原	日本評論 17・8
柴田賢次郎	右翼突撃部隊			山本 和夫	泰・ビルマ国境突破	
火野 葦平	火薬の山に点火			高見 順	ヴィクトリア・ポイント見聞記	
寺下 辰夫	塹壕で聴く故国の音楽			山本 和夫	英霊ラングーン入城	
尾崎 士郎	水牛団結す新戦場			高見 順	ラングーン通信	
上田 広	コレヒドール攻略			倉島竹二郎	シュエゼン部落訪問記	
尾崎 士郎	友無事帰る			高見 順	マンダレー入城	
上田 広	鉄の鯨			山本 和夫	ビルマ独立軍	
尾崎 士郎	マッカーサーの靴			倉島竹二郎	サナペンの一日	

山本 和夫	モールメン市街			(尾崎士郎、石川達三、浅野晃、大木惇夫、他画家)	
小田 嶽夫	ビルマの草			尾崎 士郎 陣雲残筆	日本評論 17・12
山本 和夫	金のバゴダ			『ジャワ撃滅戦』(講談社、昭17・12)	
豊田 三郎	サルウイン河			大江 賢次 ジャワ風景	
井伏 鱒二	昭南日記	文学界	17・9	北町 一郎 バレンバン寸描記	
田中 克己	印度洋を見る(詩)	文学界	17・9	北町 一郎 スマトラ通信	
火野 葦平	眼	文芸	17・9	武田麟太郎 旅だより	
上田 広	火樹	文芸	17・9	座談会・ジャワ従軍座談会―バタビア放送局にて	
小田 嶽夫	チャウメにて	新潮	17・9	(松井翠声、武田麟太郎、横山隆一、小野佐世男、群司次郎正)	
間宮 茂輔	死都―デリーの十日間	日本評論	17・9	海野 十三 『赤道南下』(講談社、昭17・12)	
高見 順	新生『ビルマ』記	現代	17・9	栗原 信 『六人の報道小隊』(陸軍美術協会出版部、昭17・12)	
大木 惇夫	南方への音楽文化工作	朝日新聞	17・10・6	丹羽 文雄 『海戦』(小説)(中央公論社、昭17・12)	
榊山 潤	一機還らず(小説)	日本評論	17・10	『進撃・海軍報道班作家前線記録1』(博文館、昭17・12)	
今 日出海	文化戦線にて	文芸	17・10	石川 達三 新嘉坡への道	
丹羽 文雄	機関長のこと	文芸	17・10	海野 十三 南海戦塵日記	
神保光太郎	南方日本語普及の一年	朝日新聞	17・11・25	山岡 莊八 無敵潜艦同乗記	
丹羽 文雄	海戦(小説)	中央公論	17・11	間宮 茂輔 月と共に征く	
石川 達三	異郷に病む(小説)	文芸	17・11	寒川光太郎 ボルネオ紀行	
間宮 茂輔	蘭印の植物学者	文芸春秋	17・11	北村 小松 蒼穹	
丹羽 文雄	報道班員の手記(小説)	改造	17・11	海野 十三 『ペンで征く』(日本放送出版協会、昭17・12)	
浅野 晃	ジャワ戡定余話	文芸春秋	17・12	火野 葦平 比島点描	朝日新聞 18・1・5
火野 葦平	コレヒドル島	改造	17・12	富沢有為男 インドネシアの朝	朝日新聞 18・1・19
座談会、一年の収獲(陸海軍報道班員派遣員座談会)	改造	17・12		井伏 鱒二 十七年七月下旬頃	文学界 18・1

浅野 晃	うなばらの思ひ	ひむがし	18・1	北原 武夫	爪哇の自然について	新潮	18・2
榊山 潤	武魂(小説)	文芸	18・1	〈帰還作家特集〉		文芸	18・2
神保光太郎	或る日―昭南にて(詩)	文芸	18・1	尾崎 士郎	戦場読書		
中島 健蔵	比島の農民と学生	文芸	18・1	山本 和夫	朝日(詩)		
座談会・戦争と作家		文芸	18・1	清水幾太郎	ラングーン日記抄		
(尾崎士郎、阿部知二、榊山潤、神保光太郎、他軍人)				石坂洋次郎	帰還して		
火野 葦平	歩硝線	新潮	18・1	大江 賢次	収獲ノート		
尾崎 士郎	朝暮兵(小説)	改造	18・1月・6月	小田 嶽夫	船中日誌		
上田 広	蒼生記―コレヒドール	中央公論	18・1	上田 広	六〇一号室―「マニラ日記」のうち		
井伏 鱒二	ゲマスからクルーアンへ	文芸春秋	18・1	高見 順	子供の遊びその他		
柴田賢次郎	バギオ紀行	三田文学	18・1	間宮 茂輔	雲の上		
井伏 鱒二	昭南タイムズ発刊の頃	サンデー毎日	18・1	北原 武夫	帰路		
『ビルマ建設戦』(講談社、昭18・1)				対談「決戦と文学」(丹羽文雄、火野葦平)			
吉川 英治	『南方紀行』(全国書房、昭18・1)			〈帰還作家報告〉		三田文学	18・2
火野 葦平	敵將軍(小説)	改造	18・2	倉島竹二郎	ブルジョン宣伝行		
上田 広	雨期(小説)	改造	18・2	柴田賢次郎	フィリッピンの出版文化		
三木 清	比島人の東洋的性格	改造	18・2	向井 潤吉	マニラ墓地		
清水幾太郎	土着文化の見方―ビルマより帰って	改造	18・2	大江 賢次	ボルブドール紀行		
阿部 知二	血と土と心―ジャワの感想	改造	18・2	山本 和夫	熱帯にある四季		
浅野 晃	ミナハサ乙女	ひむがし	18・2	清水幾太郎	日本文化の自己表現―ビルマより帰って	中央公論	18・2
富沢有為男	ジャワの気候	文芸日本	18・2				
北原 武夫	ジャカルタ入城日誌	文学界	18・2	『闘魂・海軍報道班員作家前線記録2』(博文館、昭18・2)			
今 日出海	比島従軍(小説)	文学界	18・2	角田喜久雄	撃滅戦記		

間宮 茂輔	アンボン島攻略			柴田賢次郎	山間部隊（〃）
村上 元三	ニューギニア作戦			上田 広	西岸部隊（〃）
海野 十三	この眼で見た海鷲の強さ			沢村 勉	コレヒドール要塞
山岡 莊八	捕虜の見たわが潜艦			三木 清	飛行場の埃
桜田 常久	哨戒第一線			石坂洋次郎	一月十三日
田中 克己	スマトラにて（詩）	コギト	18・2〜4	寺下 辰夫	比島遠征詩抄
高見 順	バーモ長官の印象	朝日新聞	18・3・19	今 日出海	空の総攻撃
三木 清	フィリッピン	中央公論	18・3	『マライ戦話集』（朝日新聞社、昭18・3）	
〈小特集・南方文化工作私見〉		新潮	18・3	堺 誠一郎	コタバル血の敵前上陸（座談会）
榊山 潤	文化的色彩に就て			里村 欣三	国境突破
北原 武夫	ジャワの文化工作			里村 欣三	アロルスター橋
小田 嶽夫	ビルマ文化工作に關連して			里村 欣三	スリム殲滅戦
上田 広	思ひ出すままに			堺 誠一郎	三人の兵の話
高見 順	芸術の背景その他（ラングレン日記より）			里村 欣三	西海岸部隊追撃記
高見 順	帰つての独白（小説）	改造	18・3	堺 誠一郎	道（東海岸部隊ジャングル突破記）
北原 武夫	上陸まで	文芸	18・3	堺 誠一郎	日本勝つてくれ
間宮 茂輔	司令官と私と猿	文芸	18・3	堺 誠一郎	白壁の家
対談「大東亜文化」（三木清、中島健蔵）		文芸	18・3	里村 欣三	戦車突撃す
倉島竹二郎	国境へ	三田文学	18・3	堺 誠一郎	シンガポール最後の日
井伏 鱒二	或る少女の戦時日記	新女苑	18・3〜4	『マライの土』（新紀元社、昭18・3）	
『比島戦記』（文芸春秋社、昭18・3）				井伏 鱒二	昭南日記
尾崎 士郎	概況			小栗虫太郎	南征雑稿
火野 葦平	東岸部隊（バタアン半島総攻撃）			海音寺潮五郎	コーランポーの記

豊田 三郎	印度人街に立ち	文庫	18・6	山本 和夫	インド人の表情	国際文化	18・9
林 芙美子	スマトラ―西風の島	改造	18・6、7	倉島竹二郎	印度の武力蹶起	文芸世紀	18・9
榊山 潤	南方記	文芸日本	18・6、12	寒川光太郎	『従軍風土記』(興亜日本社、昭18・8)	文学界	18・9
榊山 潤	『ビルマの朝』(今日の問題社、昭18・6)			神保光太郎	『昭南日本学園』(愛之事業社、昭18・8)	文学界	18・9
小出 英男	『南方演芸記』(新紀元社、昭18・6)			阿部 知二	バリ島の記	文学界	18・9
北原武夫他	『従軍随想』(講談社、昭18・6)			田中 克己	スマトラの初印象	文芸	18・9
神保光太郎	南方住民教育―マライの場合	文学界	18・7	田中 克己	昭南訣別(詩)	文芸	18・9
尾崎 士郎	一文学者の言葉	新潮	18・7	丹羽 文雄	混血児	文芸	18・9
中村 地平	時評的雑感―マライに在る友へ	新潮	18・7	里村 欣三	「ワカナ」の伝説	文芸	18・9
榊山 潤	特派員(小説)	新潮	18・7	小田 嶽夫	パンコックの思ひ出	文庫	18・9
窪川 稲子	挿話(小説)	新潮	18・7	新田 潤	猿(小説)	新潮	18・9
豊田 三郎	行軍(小説)	新潮	18・7、11	間宮 茂輔	『珊瑚の華』(三田文学出版部、昭18・9)		
小田 嶽夫	桜の木の下で(小説)	文芸	18・7	北町 一郎	『星座と花』(東成社、昭18・9)		
神保光太郎	歴史―アッツの英霊に捧ぐ(詩)	文芸	18・7	北原 武夫	『雨季来る』(文体社、昭18・9)		
倉島竹二郎	『明けゆくビルマ』(三田文学出版部、昭18・7)			榊山 潤	輸送船(小説)	日本評論	18・10
北町 一郎	『戦線の微笑』(白林書房、昭18・7)			木村 莊十	戦闘指揮所	現代	18・10
寒川光太郎	『蕉風の島々』(文松堂書店、昭18・7)			里村 欣三	キスカの奇蹟	文芸	18・11
富沢有為男	『ジャワ文化戦』(日本文林社、昭18・7)			丹羽 文雄	春の山かぜ(小説)	改造	18・11
大江 賢治	『ジャワを征く旗』(朝日新聞社、昭18・7)			日比野士郎	キスカ撤収部隊	改造	18・11
寒川光太郎	黒い瞳(小説)	現代	18・8	間宮 茂輔	『赤道周辺』(有光社、昭18・11)		
〈小特集・従軍の思出〉		三田文学	18・8	岩崎 栄	『バゴダの鐘が鳴る』(東洋文化社、昭18・11)		
太田 三郎	咬噬吧国			竹森 一男	『マライ物語』(文芸社、昭18・11)		
石坂洋次郎	酒席の感想			里村 欣三	『河の民』(有光社、昭18・11)		

大木 惇夫 『神々のあけぼの』（時代社、昭19・4）

『新生南方記』（北光書房、昭19・4、日本文学報国会編）

小田 嶽夫 「ラングーンの興奮」「美しい協力」「日本語学校学会」

豊田 三郎 「東洋の魂」「新生蘭貢案内」「釈迦祭」「愉しきビルマの旅」

倉島竹二郎 「兵士になったビルマの僧侶」「新生ビルマの諸相」「頼

母しきビルマ防衛軍」「新らしきビルマの女性」「燃え
上る日本語熱」

紳山 潤 「ビルマの英兵について」

北林 透馬 「英軍列車顛覆す」「トンゼーにて」

水木 洋子 「私とコック」「空爆の路上にて」

北原 武夫 「ジャワの話」

大江 賢次 「スラバヤ沖海戦と俘虜」「ジャワの子供たち」「原住民
の協力」「バリだより」

美川 きよ 「カックマンの話」「バリ島にて」「南方の子供達」

TOMOJI ABE 『BUDDHA'S IN THE TROPICS』『BALI

TODAY』

小坂 英一 「バリの住民たち」「昭南造船所の復興」「マカッサルの
漁市場」「メナドの民心」「マカッサルの子供たち」

井伏 鱒二 「捕虜の印度兵」

大林 清 「昭南の捕虜」「印度人に就て」「三人のマライ青年」

神保光太郎 「昭南交響楽団」「聖堂のをばさん」「日本語は花びらの
やうに」

寺崎 浩 「私と現地人」

里村 欣三 「シンガポールの避難民」「サンダカンと『風下の国』
の作者」

月原澄一郎 「小さなレモン」「白いハンカチ」「日本の衣裳」「松の
翠」

窪川 稲子 「旅の日記」

柴田賢次郎 「東へ帰る」「更生する比島軍」

阿部 艶子 「ネグロスの綿帛にて」「貨物船にて」「マニラ湾を眺め
て」

上田 広 「名乗らぬ青年」「若い俘虜」

清水 登之 「ダイヤ族の生態」

足立 知雄 「チモール島の王様」

火野 葦平 「頭と形」 文芸春秋 19・5

久生 十蘭 「海軍歩兵」 文芸春秋 19・5

木村 莊十 「忘れられぬ人々」 海軍報道 19・5

多田 裕計 「ブキテマ道路」 海軍報道 19・5

坪田 譲治 「森と兵舎のある島」 海軍報道 19・5

鹿島 孝二 「水兵の家」 海軍報道 19・5

伊地知 進 「スマトラ」 文芸日本 19・5

大木 惇夫 「豊旗雲」（鮎書房、昭19・5）

浅野 晃 「遠征前後」（日本文林社、昭19・5）

吉川 英治 「草莽寸心」（六興出版部、昭19・5）

寒川光太郎 「波未だ高し」（万里閣、昭19・5）

里村 欣三	ブキテマ高地(小説)	文学報国	19・6	火野 葦平	フーコン地区	文芸春秋	19・10
石坂洋次郎	比島の感想―カトリックのことなど	改造	19・6	大江 賢治	『陸海協力』(八雲書店、昭19・11)		
井伏 鱒二	シンガポール所見(詩)	四季	19・6	丹羽 文雄	『春の山かぜ』(春陽堂、昭19・11)		
佐藤 春夫	ジャカルタの雨(詩)	三田文学	19・6、7合併号	田中 克己	『南の星』(創元社、昭19・11、詩集)		
石坂洋次郎	湖水(小説)	三田文学	19・6、7合併号	上田 広	『星章』(大成出版、昭19・11)		
柴田賢次郎	『霧の墓地』(晴南社、昭19・6)			今 日出海	『比島従軍』(創元社、昭19・11)		
湊 邦三	『セレベス海軍戦記』(興亜日本社、昭19・6)			間宮 茂輔	『火箭の譜』(小山書店、昭19・11)		
新田 潤	マカッサルにて―現地の文化工作	文学報国	19・7	木村 莊十	『戦闘指揮所』(輝文堂、昭19・12)		
豊田 三郎	以心伝心―現地の文化工作	文学報国	19・7	鹿島 孝二	『暁の海原』(輝文堂、昭19・12)		
木村 莊十	最高の文化人を―現地の文化工作	文学報国	19・7	武田麟太郎	『ジャワ更紗』(筑摩書房、昭19・12)		
佐藤 春夫	馬來の四行詩	文芸	19・7	阿部 知二	『死の花』(小説)	世界	20・1
中河 与一	マリアナ諸島	文芸世紀	19・7	里村 欣三	『いのち燃ゆ』(小説)	征旗	20・1
阿部 知二	『火の島』(創元社、昭19・7)			火野 葦平	『激闘印緬戦線』(清話会、昭20・1、講演集)		
浅見 淵	タガログ語文学に就いて	文学報国	19・8	大木 惇夫	『雲と椰子』(北原出版、昭20・2、詩集)		
多田 裕計	密林の設営隊―ニューギニア	文芸春秋	19・8	大木惇夫編	『ガダルカナル戦詩集』(毎日新聞社、昭20・2)		
上田 広	海流	文芸春秋	19・8	神保光太郎	『曙光の時』(弘学社、昭20・2、詩集)		
榊山 潤	血は死なず(小説)	征旗	19・8	佐藤 春夫	『バリ島』(小説)	文芸	20・3
石坂洋次郎	手品師ヤッコウ(小説)	征旗	19・8	半田 義之	『珊瑚』(新太陽社、昭20・7)		
火野 葦平	勇氣について―チン丘の一角より	文芸春秋	19・9	寺崎 浩	『火樹ひらく』(新太陽社、昭20・7)		
山本 和夫	『亜細亜の旗』(みたみ出版、昭19・9、詩集)			豊田 三郎	『孔雀』(新太陽社、昭20・7)		
榊山 潤	『航空部隊』(実業之日本社、昭19・9)			岩崎 栄	『戦場の怪』(開成館、昭20・7)		
尾崎 士郎	『積乱雲』(小学館、昭19・9)						
火野 葦平	『南方要塞』(小山書店、昭19・9)						